

HOF 01-033

本田財団レポート No.33

「日本人と西洋人」

東京大学文学部教授 高 階 秀 爾

講師略歴

高階秀爾（たかしな しゅうじ）

昭和 7年 東京に生まれる。

昭和28年 東京大学教養学部を卒業。

昭和54年 東京大学文学部教授 現在に至る。

専 攻 美術史

近代フランス絵画の研究

西欧ルネッサンス美術の研究

著 書 「世紀末芸術」（紀伊国屋書店）

「ルネッサンスの光と闇」（三彩社）

「日本近代美術史論」（講談社）

「歴史のなかの女たち」（文芸春秋社）

「科学文明の復権」（共著、日本経済新聞社）

「美の思索家たち」（新潮社）

このレポートは昭和57年12月 7 日、国際文化会館
において行われた第26回本田財団懇談会の講演の
要旨をまとめたものです。

はじめに

本日は日本人と西洋人という事で、私が平素考えている事を二、三お話しして、皆様のご批判を迎ぎたいと思います。

最初に一つ、今から90年ほど前のエピソードをご紹介しますと思います。1894年、ちょうど19世紀の末ぎりぎりの事ですが、ドイツのライプチヒにある教会が古くなって修理をすることになりました。修理をするにあたって、ライプチヒはご存じの様に歴史の古い町でして、音楽家のヨハン・セバスチャン・バッハの遺体はその教会に葬られていました。そこで教会を改修する為に少し取り壊しをして新しくするという時に、バッハのお墓を移さなくてはならないという事になったのだそうです。移すにあたって大バッハは、ドイツが誇る芸術家ですから、新しいお墓を作ろうという事になりました。そこで一つ問題が起きました。バッハのお墓が教会のどこにあるかという事はわかっていたのですが、その場所にバッハ以外にもう二つほど棺がありました。ご存じの様に西洋の場合には棺におさめて葬るわけですから、つまり三人のお墓がそこにあり、そのうちのどれがバッハであるかわくわからなくなってしまうのです。お墓の中にはもちろん骨が入っているわけで、どれがバッハだかわからない。三人分の骨が出て来たわけですから、そこで、日本でしたらどうするでしょうか。多分色々儀式をしてしかるべき儀礼を行なって移すのですが、西欧の場合、お墓の中の三人の遺骨のどれがバッハかわからないと話がそれ以上進まないということで、大問題になりました。そこで彫刻家が一人登場して参ります。これはドイツのカール・ゼンナーという彫刻家です。その彫刻家と歴史家と解剖学者とでチームを組んで、三つある骨のどれがバッハかを決める委員会を作って作業をしました。幸いしゃれこうべが残っていたので、解剖学者が彫刻家を使ってそのしゃれこうべに肉付けをして行ったのです。そうすると段々もとの顔が出て来ました。現在バッハの肖像がいくつか残っていますが、その顔を肖像と照し合わせて、バッハだと決めました。こうして、これこそがバッハだという骨がわかり、そのバッハの遺骨を新しいお墓を作ってそこに収めました。他の二人についてはどうなったか私は知りませんが、とにかく無事バッハの新しいお墓ができ、教会も新しくなったという話です。



靈魂と肉体

●最後の審判

私は美術をやっておりますが、美術の上で西欧にはよくその様な話があり

ます。中世以来、西欧でしばしば出て来る美術で、教会などでよく描かれるテーマが、ご存じの最後の審判です。最後の審判の日に我々は再びお墓から甦って神の前で裁きを受け、天国へ行く人もいれば地獄へ行く人もいる、という形で最後の審判があるわけです。この最後の審判の絵が西欧では沢山残っています。非常に有名なものでは、ご承知の方も多いと思いますが、ローマのバチカンのシステナ礼拝堂の奥の壁に描かれております、ミケランジェロの最後の審判があります。このミケランジェロの場合も、またイタリアでもフランスでも沢山例がありますが、その最後の審判の場面というのは、当然天から降りて来たイエス様がおられて、その周りに聖人やなにかがいますのですが、下の方に我々のような普通の人間がお墓から甦って来て、そして裁きを受けています。この裁きも大変明確に、面白い形で表現されています。天秤があって、天使が計りを持っています。その天秤に魂をかけて、天国の方に傾くか、地獄の方に傾くかではっきりわかるのです。地獄の方に傾けば彼は地獄へ行く、と実に明確に話が進むのです。天秤にかけられる人間はお墓に入っていて、そのお墓から出て来るわけです。これは最後の審判のラッパが吹き鳴らされると、お墓から死者が甦るという事になっていて、作品によってはお墓の蓋をあけて死者が出て来る所も描いてあります。ところがミケランジェロの壁画や、その他にも数多くの例がありますが、お墓から出て来た人間は、長い間お墓に入っていますから、当然骸骨の姿なのです。骸骨が出て来て立ち上る。立ち上った時には人間の形になっているのです。神の前に行く時にはもとの人間の形になって、そして裁きを受けるのです。これが絵の上できちんと描かれています。つまり白骨というのでは最後の審判の日に甦るから、その甦った時に間違われると困まるので、この骨は誰だ、という事にならないといけない。恐らくそういう考えでバッハの場合も他の人の骨と間違えては困るので、きちんとこれがバッハだと決めて、改めて葬ったのだと思います。これは、お葬式というのは世界中どこでもあるのですが、葬式の儀礼の中で、人間の体、肉体を最後の審判の日までずっととっておくという思想です。これはキリスト教に限りません。その様に肉体を大事にする習慣は、もちろん様々な民族にもあります。

●エジプトのミイラ

すぐ思いつくのがエジプトの場合でして、この場合には骨にならないようにミイラにします。エジプトの場合は、偉い人にはピラミッドという大きなお墓があります。普通の人でも死んだ場合に、エジプトも靈魂不滅の思想がありますから、靈魂はどこかにさまよっている。しかしそのさまよっている靈魂は肉体がないと困ってしまう。これは時々帰って来て休むためなのだそうです。その休む場所がないと困る。そこで体をきちんととっておく。その為にミイラにします。この場合にはきちんと腐らないようにしてミイラにするテクニックが色々あるようでして、香を焚き込んだりしています。エジブ

トの文書を見ますと、ミイラにする仕方が色々あって、お金を沢山出すと立派なミイラを作ってくれるのだそうですが、いずれにしても体がないと困る。これはキリスト教の場合と宗教的な考えは違うかもしれませんが、やはり人間の肉体は非常に大事で、当人の体がないと困るということです。

●日本の葬式

日本の場合を考えてみますと、霊魂と肉体という考え方はもちろん昔からあったはずですが。しかしながら、個人の体をそれほどまでにして一生懸命とっておくということは、我々にとって必ずしもピンと来ないものがあります。この事については専門家の本があります。井之口章次さんという民俗学の研究をされている方ですが、「日本の葬式」という本を書いており、その中でこういう事を述べております。『一般に死体を尊重し保存する民族と、死体は捨ててしまっただけの中の霊魂だけを祭る民族があり、日本は後者に属している』つまり日本では霊魂の方を一層重んじるというのが井之口さんのご説です。こうも言っておられます。『古代の葬法では死体は汚れたものとして山野や野辺に打ち捨てて顧みず、そこから浄化された魂だけが祖霊としてお祭りの対象となって来た』つまり日本人の場合は、霊魂と肉体と分けた場合、比較的霊魂の方を重んじているのです。

エジプトやキリスト教の場合には、一人一人の霊魂がずっと最後まで遺体に残っているのです。従って体がはっきりしています。日本人の場合では、人が亡くなると49日間、魂は家の棟を去らずと言います。その辺のどこかにあるらしいのですが、それが段々時間がたつと、祖霊と同化して一つになって、しかるべき場所に行く。そういう霊の集まる場所がいくつかあるそうです。これは民俗学の分野で色々研究がある様ですが、恐山とか奈良の東山とかいう所に行くと祖先の霊に触れることができる。そういう様な霊魂に対する信仰は非常に厚いのです。それに対して肉体の方は、もちろんしかるべく手当てはするのですが、ずっととおかなくてはいけないと言う思想はありません。これが日本の考え方の特徴だという事を、民俗学者が言っております。

●基本的違い

その他の民俗学の本を読んでもみますと、日本人の場合は仏教が入って来たら、きちんと遺体を埋葬するという習慣ができてくるのです。しかし基本的な考え方として肉体というのは、特に死者というのは汚れていると考え、従って大事にとっておくよりは何とかして浄化したい。水葬といって水に流したり、古い時代には山野に打ち捨てておくという事もあったでしょう。あるいはそのまま焼き捨ててしまうという様な形で、霊魂に対する信仰が非常に強いのです。その様な違いは、かなり基本的な差ではないでしょうか。

これをもう少しつきつめて参りますと、肉体というのは個人個人、一人一人の本人であるというアイデンティティが、西欧の場合には非常に深く結びついています。死後においてもそのアイデンティティは保たなければいけないのです。最後の審判の日まで、エジプトの場合ですと未来永劫ですけれども保たれていて、これは誰その肉体であり、他ならぬその人の体であるのです。そして霊魂は時々そこに戻って来るといような場合には、他ならぬその人の魂が戻って来るのです。

しかし日本の場合ですと、魂があるという信仰が確かにあるのですが、それがいつのまにか祖礼と同化してしまいます。ですから誰か一人の魂ではなくて、祖先の霊と一体化する事によって魂が安住の地を得る。そして、肉体の方はどちらかと言えば顧みられない。どうもこの方に属するようです。もちろん現在では打ち捨てるとい事はなく、日本は日本なりに葬る形式があります。特に肉体が葬られない人は成仏できないといので、それなりの儀式が考えられています。しかし、基本的な考えは、骨になった人はすべて同じであり、どの骨が誰のものでそれを最後まで保とう、という様な考え方は弱いのではないかと考えられます。

形 見

実は私が以前雑談の中でこの話を致しましたら、それに対して、しかし日本人にも、例えば戦没者あるいは事故の場合に、遺族の方々が遺体に変執着される。今でも遺骨調査団が派遣されて南方の島などで、「ほんの一片でも良いから遺骨を祭りたい」と大変骨に執着しています。つまり肉体に執着しているのではないか、というお話がありました。私は、そういう事は確かにありますが、これは西欧の場合と、例えばバツハならバツハの骨をどうしてもとっておくといのは多少意味が違ふと考えます。といのは、これもよくありますが、遺骨収拾の方々が行かれても、実際にはなかなか見つからない場合が多いのです。その様な場合に、どうしても見つからなければ、せめて服装の一片でもよい。あるいは水筒とか銃剣とか、つまり身につけていたものを故人を忍ぶよすがとして集めて来て祭る。つまり、日本人の場合には故人のお骨があればもちろん良いわけですが、そうでなければ身につけていたものでもかまわないのです。それは故人を忍ぶよすがでして、その骨そのものがいずれまた本人として復活して来るといような信仰は全くありません。身につけていたものといのは形見です。形見といのは大変大事な物で、故人を忍ぶ為に、亡くなられた方の形見を皆さんが分けるのと同じ思想だと思います。この形見といのは文字通り形を見るのでありまして、この形といのが私は日本人のものの考え方、あるいは価値感に変大きな役割りを果たしているのではないだろうかと考えます。

●古代建築に於ける形

あまり陰気な話ばかりでは具合が悪いので、私が外国から来られた美術の先生と一諸に日本を回った時の事をご紹介します。この方はもちろん西欧の美術を専攻している先生です。

初めて日本にいらした方で、伊勢神宮に参りました。日本の建築に西欧の方は大変に感心されます。木造の立派なもので、しかも余計なものがない大変清々した建築というのは大変見事であります。特に伊勢神宮の場合には周りに大変見事な自然があって、その中にああいう素朴でしかも美しい建築があるという事で、どなたも感心するのです。ただ、その美術の先生と話をしている時に、一つだけどうしても話が通じない事がありました。建築的な問題はもちろん専門の方ですからよくわかります。木造建築と石造建築の違いという事もわかります。どうしてもわからないのは、伊勢の場合にあります遷宮です。私は遷宮という行事の説明をしまして、20年毎に建て替えがあって現在の建物は1968年に建てられたと申しましたところ、私共の間で議論が occurred。「するとこれは20世紀に作った古い建物の復元か」と言うのです。私は「復元と言われるとどうも具合が悪い。復元ではなくてこれが伊勢神宮そのものなのだ」と言うと、その先生は納得しませんで、「これはたった十何年前に作ったものではないか。そうするとこれは20世紀の建物ではないか」と言われます。私は伊勢神宮が20世紀の建物だとは考えた事ありません。これは日本の上代の建築だと考えております。これは私に限らず日本で美術建築をなさっている方は皆さんこれは上代の建築という事で、古い建築のところに話が出て来るのです。しかし西洋的な考え方からいきますと、20世紀に作ったものならば20世紀の建築である。そしてもしそれが古代の型を受継いでいるのであれば、これは西欧にも例がないわけではありませんが、古代のまねをした20世紀建築だという事になります。19世紀にはヨーロッパでしきりにそういう事が行なわれまして、ギリシャ風の建物とか、ゴシック風の建物ができたのです。有名な例では、ロンドンのテムズ河畔にあります国会議事堂で、これは19世紀の建物です。実は古い建物が1834年に焼けました。大変大きな事件で、100年ちょっと前の事です。新聞やマスコミにも色々騒がれました。古い国会議事堂が焼けて、とにかく新しいものを建てるという時に、「どういう建築様式で建てようか」という議論がありまして、様々な案が出されたのですが、最終的にはゴシックでいこうという事になりました。当時、ゴシックがはやっておりまして、ゴシック復興と呼ばれるようなゴシック趣味の時代でした。ゴシック式建築で建てるという事になって、バリー卿という建築家が設計して作ったのです。行ってごらんになると分りますが、完全に細部に至るまでゴシック風でありまして、ゴシックの教会堂のように礼拝堂形式の場所まであります。しかし西欧ではこの国会議事堂をゴシックの建物とは誰も言いません。あれは19世紀の建物であって、19世紀はゴシック復興の時代だから、19世紀に作られたネオゴシックとか、

ゴシックリバイバルの建物なのだと言っています。そこで西欧の先生は「伊勢神宮というのは20世紀に建てられた古代復興の建物だ」と同じような考え方から言われるのです。

そこで私は色々な説明をしたのですが、結局その辺の事はよく理解して頂けませんでした。というのは、西欧の場合はなるほど建築というのは、その作られた時代のものであります。ゴシックはゴシックの時代に作られています。ロマネスクはロマネスクの時代に作られています。後の時代に、もし古い時代の様式で建てられれば、それはコピーであり、あるいは復元であり、あるいは後世の模倣なのです。例えばフランスにシャルトルという、パリからちょっと西南に行った所に大変有名な大聖堂があります。これは、実は半分ロマネスクの建物で半分ゴシックの建物でありまして、建て始めた時がロマネスクの時代、11世紀です。ですから下の方はロマネスク風の建物になっています。ところが西洋は石の建物ですから大変な時間で、100年以上かかりまして、段々上の方にいった時にはゴシックの時代になっていました。そうすると上の方はゴシック風の建物になってしまったのです。例えば色々な違いがありますが、一番はっきりしているのが入口のアーチです。一番下の正面の入口は完全な半円形のアーチになっています。それから段々上の方へ参りますと両方に塔があります。塔の上の方の窓の所は先のとがったアーチになっています。つまりゴシック風のアーチになっているわけです。その様に建てた時の形がはっきり残っていて、あの下はロマネスクで上はゴシックだと見てわかるのです。つまりその時代時代の刻印を残しているのです。イギリスの国会議事堂にしても、これは記録があるからわかるのですが、もし記録が何もなくなって建て物だけを調べた場合、これは専門家が色々調べておりますが、全くゴシックの真似をしながら、至る所でやはり19世紀の建物であるという、ゴシックにはない様な部分が出て来ます。どうしても誰が見てもゴシックの建物とは言えません。建物は基本的に一つの物としての性格を持っています。これは他ならぬ19世紀に建てられた建物だという事です。ゴシックの様式を借りてはいるけれど、それは単にゴシックを真似したにすぎないという考えです。ロンドンの国会議事堂は調べれば色々な所があるのですが、もし仮りに伊勢神宮の様に古い建物と全く同じ物、寸分違わない物をどこかに作ったとします。これは小さい物では実際にそういう例があります。そうするとそれは寸分違わないからゴシックと言えるか、と言うとこれは言えません。美術の世界でしばしば本物・偽物という事が問題になりますが、建築でもそれがあって、もし現在全く同じ物を作ったとしますと、これは良く言って復元、悪く言えば偽物であります。そのフランスの先生はどうしてもその様な考え方をしますので、伊勢神宮はそれでは偽物かとまでは言いませんが、昔の建物のコピーではないかと言われるのです。それはあたかもどこかにきちんとした元の物があって、木造ですからあまり持たないので、傷むといけないうので新しいのにして人に見せるという、ちょうど西欧では偉いお金持ちや貴族の方が立派な宝石、首飾りなどを持っていると言われれば本物は銀行

か何かに預けておいて、イミテーションを普段使っている。見たところは十分違わないけれど実は違うという、ちょうどそのイミテーションみたいな物ではないか、とまで言われるのです。

私はそこで日本人ですから、「いやそんな事はない、あれは新しくできたものが本物なのだ。それが1200年来ずっと続いているのである」という議論をしました。その時につくづく考えたのですが、日本人の方でしたらおわかりになると思います。伊勢神宮はコピーだとは誰も思いません。新しい建て物ができた時にそれが本物になるわけです。材料はなるほど20世紀のものです。20世紀に作られておりますけれど、建築史では上代の建物として扱いますし、我々もまた古くからの神社として崇めます。それは考え方の問題です。例えば宝石のイミテーションの様に考えられると困るのでありまして、我々としては新しい遷宮の結果、建物が建てばそれが本物になるのです。そうすると本物とコピーとどこで見分けるのだらう、と私は考えさせられました。西欧の場合には非常にはっきりしております。本物というのは昔の材料を使って、物その物が昔の物です。仮りに20世紀に新しい材料で作れば、本物そっくりに作ってもコピーです。日本の場合にはそうではないのです。伊勢神宮が1968年に作られても本物であるのは、それがもちろん形は昔のままで、そしてその形を受継ぎながらそこに神社の一番本質的な物が受継がれていると考えるからです。材料そのものではなくて、形が受継がれている事が大事です。形が受継がれる時に、一番大事な本質もそこに受継がれて来ると考える。従って、我々は十数年前に作られた伊勢神宮を古くからの神社として少しも疑わないのです。

このような違い、これは考えてみますと、実は色々な所に見られるように思います。つまり一人一人の人間が、体と魂とを切り離す事ができず、あくまでもくっついていてその世界と、実は魂もいずれは祖霊に同化し体はなくなってしまってもかまわない、しかし形はずっと形見という形で、あるいは形という文字通りそういう形式で受継がれていく、それが一番大事だと考える考え方、これは非常に違うのではないのでしょうか。

そこで外国の方々と色々話す時、似たような問題が出て来るたびに、私はその事を考えさせられました。

個人の西洋と役割りの日本

●王位継承と歌舞伎役者の襲名

もう一つの例を申し上げますと、外国の方をご案内する時、これももう決まったコースですが、歌舞伎にお連れします。その歌舞伎の役者さんの事です。これは団十郎だとか菊五郎だとかいう、あの名前についての説明が西洋の方にはどうもわかりにくいようです。あれが菊五郎で今や七代目だとか十何代目だとかいう様に申します。そしてその前に菊五郎という名前の人が何

人もいて、現在は六代目だとか七代目だとかいう様に説明しますと、そこまでは大変よくわかってもらえるのです。西欧でも同じ名前の王様がいて、ルイ14世だとか15世だとかがいるし、イギリスにもチャールズ1世だとか2世だとかがいます。同じ名前だと区別が付きませんから、背番号のようにして番号をふっていくのですね。一番目二番目、という様に。そういう事かと理解されるのです。しかし、日本の場合は多少違う、いや大いに違う。なるほど同じ名前の方々がいて、何人もいるから何代目というのですけれど、しかしルイ16世とかルイ15世は生まれた時にルイという名前が付きまして、これは他のルイと違うんだという事で何番目という番号が付くわけです。しかし日本の場合には、大体名前が変わります。襲名という事を致しまして、菊五郎というのはその襲名の時初めてなるわけです。団十郎にしても羽左衛門にしても同じです。きのうまでは海老蔵であったが、今日からは団十郎になるのです。そしてその時に初めて何代目という事になります。そうすると、きのうの海老蔵はどこに行ったんだという事になります。きのうの海老蔵は人間の体としては今日の団十郎に続いているのですが、これは何と言ったら良いのでしょうか、別の人格になるわけです。そして、その団十郎なり菊五郎は何代かずっと続いて来て、それぞれ別の人ですけれども、しかしやはりつながっているのです。菊五郎風でなければいけない。今日団十郎になったら、海老蔵であっては困るのです。周囲も期待しますし、本人もその気になるわけです。ですから歌舞伎の役者さんの名前というのは、単なる個人に付けられた符帳ではないのです。個人を越えてずっとつながって来るものであります。そこに人間の方が入り込んで行くのです。人間の方が入り込んで行って、たまたまその人間が何番目かという事で何代目という事になります。つまり、そこで役割りを与えられるのです。その役割りは、団十郎なら団十郎風の役割りでないといけないうのです。私は他の団十郎とは全く違うのだという事では、まず襲名もさせてもらえません。色々な資格が必要でしょうし、団十郎の名前を継ぐにふさわしい人でなければ困る、という事は基本的にあるわけです。

こう考えてみますと、これはどうも伊勢神宮の形と同じ事でして、19世紀の団十郎も20世紀の団十郎も別の人ですけれども、その名前を通じてつながっているのです。そして、別でありながら一つにつながっているという所が日本の特徴なのです。昔の場合には役者さんだけではなくて、商家の方も武士の方も父の名前を継ぐ、いつまでたっても何とか左衛門というのがずっとその当主であったり、という事がありました。そういう考え方というのは、やはりルイ15世なんかとは全く違うのではないのでしょうか。

これをもう少し広げて考えてみますと、逆に言いますと、個人の持っている輪郭といいますか、あるいはその実質というのが、それほど明確ではない。西洋の場合には個人というのは、あくまでも骨の髄から外の皮膚のまさに先に至るまで個人でありまして、その人は他の人とは違うのだという事が一番の基本であります。個人(individual) というのは、もともとは分けられない

という事です。divide できない、という事です。まさに他にもう分けられない最後の単位でありまして、他の人とは違う何かがある。その人の持っているアイデンティティというのは、他とまざり合う事ができないのです。従って20世紀にできた建物は、20世紀のアイデンティティを持っています。古代の物と紛らす事はできないわけです。

しかし日本の場合ですと、団十郎、なるほど十代目と十一代目は違いますが、しかしつながっているのです。20世紀の伊勢神宮と上代の伊勢神宮と違うのですけれどもつながっています。そういうつながりというものが非常に大事であって、むしろそのつながりに本質がある、という様に考えます。そうすると、人間の方から考えると、例えばきのうの海老蔵が今日の団十郎になったという場合には、襲名する事によってある一つの形の中に入っていくのです。あるいは、決められた人格の中に入っていくのです。これは別の言い方をしますと、役割り効果とでも言いますか、海老蔵の時は海老蔵風であって、団十郎になれば団十郎風になるという、その役割りを演ずるわけです。子供の時には子供の名前があって、元服すれば名前が変わって、当主になればまた名前が変わる。それぞれ、その役割りに入り込んで行くわけです。

このような考えというのは、やはり西洋と比べますと、全く日本の特徴ではないかと私は考えます。

●チェスと将棋

もう一つだけ例を出させていただきます。そのフランスから来た方と私は昔から親しかったのですが、よくフランスにいた時も私はチェスを致しまして、私はあまりできないのですがその人が大変好きなので教えてもらいました。日本に来ると歌舞伎座なんかで将棋盤などを売っております。日本の将棋だと言うと、その人は大変チェスが好きなので興味を持ちまして、お土産に買って帰りたいというので記念に持って行かれたのですが、その時に説明致しました。実は私は将棋に関しましては以前升田幸三九段の随筆で、こういう話を読んでおりその話をご披露したのです。ご承知の方も多いかと思いますが、戦後間もなくGHQの人が将棋をやめろと言った事があるそうです。どこまできちんとした命令であったかわかりませんが、忠臣蔵なんか上演してはいけないという時代ですからああいう封建的なものはやめろと言われたのです。その時に升田さんがGHQの担当官と会って「なぜいけないのだ。西洋にもチェスがあるではないか。アメリカだってチェスがあるのだから同じだ」と言ったら、アメリカ人の担当官がこう言われたそうです。「なるほど西洋にもチェスがある。しかし将棋はチェスと二つの点で違っている。二つの点で封建的である。第一にチェスにはクイーンがいるけれど、将棋には王様しかいない。これは男尊女卑である。第二にチェスでは死んだ駒はそのまま死にっ放しですが、将棋の場合には敵の駒をとってまた使うではないか。これは裏切りである。非道徳だ。だからよろしくない」という話です。そこ

で升田さんがG H Qの方にこんこんとこう言われたそうです。まず一つは、「なるほど日本の将棋は王様しかない。しかしチェスではもしキングが危機に立った場合、キングを取られると負けるからクイーンを犠牲にするではないか。そんな残酷な事をするではないか。これは男尊女卑ではないか。日本ではそういう残酷な事をしない為に、女性は戦場に連れ出さない。何と奥ゆかしい事であるか」更に二つめとして、「敵の駒を取って使うというのは、たまたま戦いの初めに死んだ駒があると、その人はせっかく色々な能力を持ちながらその能力を発揮せずに死んでしまう。チェスはその点も大変無慈悲である。将棋の場合には相手の駒を取ってそれをまた生かして使う。人間を生かす道である。大変人間的な勝負である。だから良いではないか」と言われたそうです。これは私が大変好きな話でよく持ち出すのですが、そうするとG H Qでは納得したのか、よろしいという事になって将棋はずっと続いているわけです。

これは大変面白いお話だと思ひまして、多少ものの本など調べてみますと、将棋とチェスは元々、同根より生じた兄弟でありまして、発生はインドだそうです。インドの王様で大変戦争が好きで、部下達を分けて戦争をさせるのが好きな困った王様がいて、本当に戦争をして相手を殺させるところまでしないと気がすまない。それでは困るというので、本当に家来を死なせてはいけないから、盤上の戦いに変えたという話があるのだそうですが、それがどこまで本当か知りませんが、しかし発生がインドである事は事実のようです。これが片やペルシャを通過して西洋に入ってチェスになり、片や中国・インドシナ・朝鮮半島を通過して日本に入って来て将棋になりました。その途中の場所にそれぞれ痕跡を残しています。それを調べてみますと大変面白いのですが、東洋と西洋とはっきり左右に分かれて差があります。西洋はなるほど、キングがいてクイーンがいて、従って盤の目の数が偶数です。日本は王様だけで、中国もそうですけれど、盤の目の数は奇数ですとか、色々な違いがあります。それから駒の作り方が大変面白いのです。西洋のチェスをご承知の様に形で決めます。ナイトとかビショップは各々それを表わした形をしていて、馬のような格好をしたものもあります。最近色々こったチェスが出てきているようです。ともかく形で決めます。日本の場合には、大小ありますが形は同じで、文字で決めます。王様とか金将とか書いてあります。文字で駒を識別するというのは、チェスも含めて世界を見てみますと、中国と朝鮮将棋と呼ばれるものと日本とこの三つだけだそうです。つまりこれは中国で発したものであって、中国は文字の国ですから、形よりも文字で駒を識別して行っただけです。それが朝鮮半島を通過して日本に来ましたから、この三つだけは文字で識別するのです。

それから駒の動きとか役割り、これは多少の差はありますが、大体似たようなものです。まっすぐいけるのもいるし、一つずつでないといけないのもあるとか、飛んではねるようなものもいて、その辺は大体同じです。ただ多少ルールの違いがあって、例えば安南将棋というのは、駒が二つ縦に並びま

すと、例えば日本式に言って歩の後ろに飛車がつきますと、前の駒は後の駒の能力を持つのだそうです。ですから歩の後に飛車があると、前の歩は飛車の能力を持ってパッと飛んでいける、というような面白いルールもあります。若干、土地土地によって違いが出て来ます。その違いを見てみると、その土地その土地の、西洋に行けば女王ができるとか、中国に入れば文字が出てくるといふ特色が出て来るわけです。

ところで、相手の取った駒を使うという、つまり駒の再使用ルールがあるのは、世界広しと言えども日本だけだそうです。日本の特色なのです。文字を書いてあるというのは中国にもあるわけですが、再使用を認めているのは日本だけで、大変独特なルールです。そのフランス人に将棋を説明する時に、この点が、伊勢神宮の時と同じように一番おわかりいただけないことなのです。「どうして相手の駒が使えるのだ。敵はもうやっつけられたのではないか。やっつけられたら葬られるのがしかるべきで、それがまた出て来るというのはどうしても理解できない」と言って、伊勢神宮の場合と同じでそこだけがまた大変問題になりました。これはまさに日本の特色と私は考えます。これはそれぞれの駒がある決まった能力を持っていて、それが最初はこちら側についていて、取られれば向こう側に行つて役割りが変わるわけです。そしてまた取り返せばこちら側になるのです。その与えられた場所によって、敵になったり味方になったりもする、役割りの変化です。きのうの海老蔵が今日の団十郎になったようなものでして、人はそれを不思議と思わないのです。西洋では名優が別の名優になるという事はある得ないのですが、日本の場合には味方の飛車が敵の飛車になったり、きのうの海老蔵が団十郎になったり、という与えられた役割りの中で自分の実力を発揮するという事が極めて普通です。それが、逆に言えば西洋の方に理解できないというのは、やはり日本的な特色なのだろうと私はその時考えました。

● ビジネスに於ける西洋と日本

当時、その問題を色々考えておりました時に、東京新聞の夕刊に随筆欄がありまして、その随筆欄に経団連の花村さんが連載で書いておられました。そこで面白い随筆がありました。経団連の事ですからビジネスの話ですが、日本の場合には、「日本の会社で労組出身の重役が3割以上いる。これは世界に例のない事である」というお話なのです。私はこれを大変面白いと思ひまして、まさに将棋の駒ではないかという様に考えました。労組から、今度は役割りが変わりますと逆に経営陣に入る。そしてこちらに向かつて来るといふ将棋の駒の役割りをするわけです。そしてそのようなやり方が、比較的日本でうまく行くというのは、やはり考え方の上で将棋の独特のルールを考え出したような考え方があるのではないかと思います。つまり与えられた場所で自分の役割りをつくす、というのが日本にとっては大変大事な事であり、またそれが重要な評価の基準にもなります。しかし西洋の場合にはしばしば

それがわかりにくいようでありまして、美術の分野で申しますと、ある美術館に勤めていて別の美術館に替わるという事が時々あるわけです。そして別の美術館に替わると「お前はこの美術館のこの仕事をやれ」と言われます。従って私の友人でも、西洋の美術館から日本のことを扱っている美術館にかわった人がいます。そうすると今まで西洋美術をやっていた人が日本の美術をやる事になります。もちろん美術ですからお互いに関係はあるのですが、昨日まで西洋の事をやっていて、今日から日本の事をやらなければいけないという事になります。これがまた西洋の人にはよくわからないのです。美術をやっている人にはそれぞれ自分の専門があるはずです。西洋美術をやっている人は、動く事がありますが、その場合、自分の専門が活かせる場所に動くのです。全く違う美術館に行って新しく別の仕事をやるという事は考えられないのです。なぜそんな事をするのだ、ときかれるわけです。それで考えてみますと、西洋の人が職場を変える場合には、あくまでも自分の仕事で変わっていくわけです。タイピストであれば別の会社になってもタイピストでやっていくとか、あるいは自動車の運転ならば運転で変わって行くのです。日本の場合には比較的会社を変える事が少ないのですが、つまり終身雇用制度があるからですが、これがまた外国と日本と随分違う点だという事はしばしば指摘されています。そのような場合に、なるほど会社を変える事は少ないけれど、会社の中での役割りは随分変わります。しばしば配置転換をして、むしろ日本の場合には国鉄などの話をきいてもそうですが、なるべく色々な事をやらせます。最初は改札・車掌・現場、さらには実務・デスクワークと、色々な事をやらせていって、良く会社の中の事を知るとというのが日本のやり方です。

西洋の場合ですと、私はフランスの例しかわかやないのですが、最初から役割りが決まっています。現場は現場、デスクワークはデスクワーク、幹部は幹部という様に決まっています。従って幹部の人が現場に出て行くという事はよっぽどの事がない限りありません。従って最初から自分のやるべき事が決まっています。もしそこでうまくいかなければ、会社を変わって自分のやるべき事をやります。

ところが日本の場合ですと色々な所で役割りを変わって、その役割りを見事に果たすのが優れた人だという考え方が非常に強くあります。

これがしばしば、日本人と外国人がつき合う際、そういう事がよくわかっている人だと良いのですが、もしわからない場合には、よく問題になります。私も学生時代などに通訳をさせられたのですが、「私の立場から言うところだ」という発言を訳す時は大変難しいのです。つまり、「立場から」というのはその人の本当の考えなのか、それとも本当の考えではないのか。役割りですから、その人の立場上この役割りを果たしているから、これはこうなのだと私にはよくわかるのですが……。例えば、労組にいる時にはこう言うけれども、重役になったら逆の事を言うかもしれないのです。それはそれで当然だと我々は考えます。しかし外国の人にはそれがなかなかわかってもらえ

ないのです。「立場上」というのは一体あなたの意見なのか、それとも例えばあなたの上司の意見なのか、上司の意見を取りついでいるだけなのか、お前の個人の意見なのか、という事になりますと、大変微妙であります。もし個人の意見だという事になれば、立場が変わった時に意見が変わっては困るわけです。

しかし日本の場合には、「私の立場から」と言う場合に、全く他の人の意見を言っているわけではなく、あくまでも自分の意見を言っています。ちょうどこれは団十郎役者が団十郎の役割りをやっているのと同じ事であります。そうすると、ある役につけられるというのは襲名に似ているかもしれませんが、そのような立場に立った時に果たすべき役割りというのが、本人も周囲もきちんとお互いにわかっている。そのような形で人間のつながりが成立している所では、「立場」というものははっきりわかります。ですから「私の立場上」というのはもう少しぶちまけて言えば、「本心はこうだけれど、立場上はこうだ」というような形にまでなります。それは比較的日本では通りやすいのです。西洋ですと、「本心はこうだけれど、立場上はこうだ」といいますと、「あいつは一体何だ」、つまりずるいとか不誠実であるとか、正直でないという事になってしまうのです。それは考えてみますと、私のフランス人の友達がどうしても将棋の駒の再使用がわからなかったように、いくら説明してもわからない事ではないでしょうか。あるいは伊勢神宮を色々説明して、なるほど立派だけど20世紀の建築だと思って帰って行ったのですが、そういう事にならざるを得ないのです。それはどうも基本的に考え方の一番根本の問題に遡って行くだろうと思います。

襲名の話が出ましたので、名前の話をもう一つだけ付け加えさせていただきます。

●個人のアイデンティティを重じる西洋

西洋では、人の名前が個人と非常に密接に結びついていますから、一人の人が勝手に名前を変えるとか、あるいは個人を越えた名前があるという事があまりないわけです。そうすると、名前を使う事は個人を非常にはっきり出す事になるわけです。そして個人を出す事が、西洋の場合にはその個人の、他ならぬ他人ではない人だという特徴を出すところに意味があるのです。死後に至るまで、バッハはバッハでなければいけないわけです。それを保つ為に個人の名前というものを、フランスでもイギリスでもアメリカでもそうですが、後々まで残そうとします。フランスでは町の通りの名前に、しばしば個人の名前がついています。偉い人が死ぬとその人の名前がつけられます。数年前にポール・ヴァレリー通りというのができましたし、またエトワールの広場が今やシャルル・ド・ゴール広場となりました。このように個人の名前がはっきり出てきます。それは他の人ならぬその人だという事を、はっきりと顕彰するためでありまして、飛行場の名前なんかもそうです。パリから

ニューヨークに飛びますと、シャルル・ド・ゴール空港から発ちましてケネディ空港に着くわけです。ド・ゴールとかケネディとかいう名前がそこに出てきます。

日本では地名とか通りの名前に人の名前を使うという事は、まず普通には見られません。成田空港というのでもっているものであり、あれを仮りに佐藤栄作空港と言ったら大変な事になると思います。今ぐらいの騒ぎではすまなくなります。つまり個人が出てくるのは具合が悪いのです。個人というのは、ある役割りの中にいて初めて意味があるのです。従ってむしろその立場でもって動き回るのです。逆に言えば、個人が表に出ては具合が悪いという観念が非常に強くあります。その立場の中にいれば物事がうまくいくようなシステムになっています。

船の名前で言いますと、私の息子が軍艦が好きでプラモデルを沢山作っているのですが、日本の海軍というのはご承知のように、黒船以来、全く西洋のまねで作ったわけです。新しい海軍はイギリスのまねをして、軍艦も日清日露の時からイギリスやオランダに注文して作らせています。システムも船の形も技術も全部西洋から取り入れて、日本は海軍を作ったわけですが、その海軍が唯一西洋から受け入れなかったものが、船の名前であります。フランスの戦艦にはリシュリューだとか、イギリスではネルソンだとか、ドイツではビスマルクだとか、偉い提督や指導者の名前を付けます。日本の戦艦で東郷平八郎だとか東郷丸だとかいう名は付いておりません。日本の場合には人間の名前ではなく、陸奥・長門等の国の名前から初まり、天然現象である霜月・不知火・朝霧という名前が付けられています。これはやはり個人がはっきりと輪郭を持って、表に出ていないということです。逆に個人が強く表に出るのを嫌うという独特な習慣というものが、そういう所にも出ているのだと思います。

● 軒下で始まる日本の文化と社会

そのような例は、考えてみますと他にも色々あります。おそらく日本の場合には、役割りというのはある人間の関係の中に立って初めて成立する事ですから、個人がどこにいても一人でいるのではなくて、ある関係の中に立って初めてしかるべき力を出すのです。将棋の駒にしても、こっちにいるか向こうにいるかはっきり役割りが違うわけですから、そのような人間の関係というものが、日本の文化を一番はっきりと規定しています。逆に言えば、個人の輪郭ははっきりしていませんから、個人と個人の間というのはかなりあいまいな部分があります。

日本の建築にも、その様な特徴が表われています。以前私は、日本の建築は軒下建築だと言った事があります。軒下というようなあいまいな部分が残っています。西洋の場合は個人が一人一人輪郭が明確な様に、建物も一つ一つ輪郭が明確です。ここまではこの建物、それからその建物の外と内という

のも明確です。日本の場合には、日本建築ですと、建物の外だか内だかわからない中間部分というあいまいな部分があります。軒下はその典型的なものです。あるいは濡縁、露台でもいいですが、同様にあいまいな部分があります。これは中と言えば中、外と言えば外、という非常にはっきりしない部分で、軒下と普通言っておりますけれども、軒下というのは中から見た時に軒下というので、外から見ますと、庭師や植木屋さんは軒下の事を軒内と言います。あれは外から見れば内の部分に入るのです。しかし家の中から見れば外の部分に入るのです。そして軒下の部分というのは実は所属がはっきり致しませんで、つまりその家に属しているのか、公共の部分に属しているのか。道路がありますと道路はもちろん公共部分です。そこに家が並んでいると、軒下は一体どっちなのか。全く公共部分とはいえない。軒下に自転車が置いてあったり、昔ですと炭俵が置いてあったりします。そうすると道に落ちているのと違って、これはこの家のだな、と誰もがわかりますから、そうすると軒下というのはどうも内に属しているようです。しかし雨が降って来るとちょっと雨宿りする。外の人が黙って入って行ってもまあ良い。ですから半分は公共部分なのです。その辺の関係は大変あいまいでして、それでは雨宿りして良いからそこで寝泊りして良いかと言うと、寝るとやっぱり具合が悪いのです。ある程度までは良いのです。江戸時代の川柳に「お前方、本降りだよととじゃまがられ」というのがあります。軒下でちょっと待っているのは良いのですが、本降りになって来るともういてはいけないという事です。いつまでもいられては困るので、ちょっとの間なら良いけれど、本降りになったらどうせ出て行くのだから早く出て行け、というような感じで日本の伝統的な感覚があるようです。

現代になりますと段々西洋的な思考が入って参りますから、軒下なんかもはっきりしなければいけないというので、建築基準法ができてからこれははっきりしました。建築基準法というのは、敷地と建物の関係で建ぺい率というのがあります。あの建ぺい率に軒下を数えるか数えないか、という問題が出て来まして、なるべく沢山建物を作りたい時、あれは外だと言ってしまおうと、うんと屋根を延ばしたりしてそこに物を置かれたりすると困る、というので、現在の建築基準法では確か1 mを越えた場合には建ぺい率に含めるという事になっています。法律というのはどこかで区切りをつけないといけないのです。つまり1 m以上になると、あれは内のものだというふうにみなす事になっているのです。事程左様にあいまいな部分なのです。そのあいまいな部分というのが日本の中ではかなり重要な部分なのでして、昔はそこでちょっと恋人同志が語らったり、あるいは縁側などは外と中のちょうど中間の部分ですが、縁側で月をながめてみたり、という重要な営みが行なわれました。従ってこれもなかなか外国にはないものですから、説明しにくい部分なのです。

考えてみますと、ちょうど人間と人間の間の関係も同様です。軒下というのは、かなりはっきりしない、しかし何かある種の基準はあるのです。

あまり長くいてはいけないという事があるのですから、何か感覚的にわかる、日本人ならわかる基準があるのです。その基準に従って関係を保って行くというのが、日本の文化を成り立たせている非常に基本的な部分であります。それはおそらく、伊勢神宮などで新しい建物でもやはり我々はそこに昔からの連続性を認めるとか、人が替わってもこれは団十郎だと認めるという感覚と同じだろうと思います。そのような骨なり肉なり肉体としての個々の物質的な存在と言いますか、あるいは家なら家の形を越えた部分でのつながり、その部分を活かして行くという事が、どうも日本の社会を非常にある意味では支えている部分だろうと思います。

おわりに

しかしこれは同時に、最も外国、特に西洋にはわかりにくい部分であります。私も色々どどの様に説明したら良いか苦勞する所なのです。多分一番わかりにくい部分というのが、お互いにとって一番大事な部分であろうと考えます。我々は西洋の事を、なるほど西洋にはこういう考え方があるのかという様に、随分勉強して参りました。今では日本が一体どういう事かと色々問われています。その時の一つのヒントとして、私はそれが全てだとは思いませんが、しかし非常に重要な部分として我々はこの事をどう考えるべきでしょうか。とにかくこういう事実がある事は確かであり、それをどの様に一つの体系として外国人に説明して行くかが重要だと考えます。日本にはこういう考え方があるのだ、こういう価値判断があるのだ、こういう基準があるのだ、という事をはっきり説明し、そしてなるほどそういう違いがあるのかと認識してもらい、その上で色々話を進めて行くべきだと、私も多少とも外国との交渉にかかわっている時に感じております。日本が西洋とつき合う場合に、まず自分自身の、日本人の色々な特徴をきちんともう一度整理してみる必要があるのではないのでしょうか。それが日本を知る所以でもあり、同時に外国に日本をわかってもらえる所以でもなかろうか、と普段そのような事を感じております。

ご清聴ありがとうございました。

本田財団レポート

No.1	「ディスカバリーズ国際シンポジウム ローマ1977」の報告	昭53.5	No.19	自動車事故回避のノウハウ	昭55.10
	電気通信大学教授 合田周平			成蹊大学教授 江守一郎	
No.2	異文化間のコミュニケーションの問題をめぐって	昭53.6	No.20	'80年代－国際経済の課題	昭55.11
	東京大学教授 公文俊平			日本短波放送専務取締役 小島章伸	
No.3	生産の時代から交流の時代へ	昭53.8	No.21	技術と文化	昭55.12
	東京大学教授 木村尚三郎			I V A 事務総長 グナー・ハンベリユース	
No.4	語り言葉としての日本語	昭53.10	No.22	明治におけるエコ・テクノロジー	昭56.5
	劇団四季主宰 浅利慶太			山本書店主 山本七平	
No.5	コミュニケーション技術の未来	昭54.3	No.23	西ドイツから見た日本	昭56.6
	電気通信科学財団理事長 白根禮吉			電気通信大学教授 西尾幹二	
No.6	「ディスカバリーズ国際シンポジウム バリ1978」の報告	昭54.4	No.24	中国の現状と将来	昭56.9
	電気通信大学教授 合田周平			東京外国語大学教授 中嶋嶺雄	
No.7	科学は進歩するのか変化するのか	昭54.4	No.25	アメリカ人から見た日本及び日本式ビジネス	昭56.10
	東京大学助教授 村上陽一郎			オハイオ州立大学教授 ブラッドレイ・リチャードソン	
No.8	ヨーロッパから見た日本	昭54.5	No.26	人々のニーズに効果的に応える技術	昭57.1
	N H K 解説委員室主幹 山室英男			GE研究開発センター・コンサルタント ハロルド チェスナット	
No.9	最近の国際政治における問題について	昭54.6	No.27	ライフサイエンス	昭57.3
	京都大学教授 高坂正堯			㈱三菱化成生命科学研究所人間自然研究部長 中村桂子	
No.10	分散型システムについて	昭54.9	No.28	「錬金術 昔と今」	昭57.4
	東京大学教授 石井威望			理化学研究所地球化学研究室 島 誠	
No.11	「ディスカバリーズ国際シンポジウム ストックホルム1979」の報告	昭54.11	No.29	「産業用ロボットに対する意見」	昭57.7
	電気通信大学教授 合田周平			東京工業大学教授 森 政弘	
No.12	公共政策形成の問題点	昭55.1	No.30	「腕に技能をもった人材育成」	昭57.7
	埼玉大学教授 吉村 融			労働省職業訓練局海外技術協力室長 木全ミツ	
No.13	医学と工学の対話	昭55.1	No.31	「日本の研究開発」	昭57.10
	東京大学教授 渥美和彦			総合研究開発機構(NIRA)理事長 下河辺 淳	
No.14	心の問題と工学	昭55.2	No.32	「自由経済下での技術者の役割」	昭57.12
	東京工業大学教授 寺野寿郎			ケンブリッジ大学名誉教授 ジョン F. コールズ	
No.15	最近の国際情勢から	昭55.4	No.33	「日本人と西洋人」	昭58.1
	N H K 解説委員室主幹 山室英男			東京大学文学部教授 高階秀爾	
No.16	コミュニケーション技術とその技術の進歩	昭55.5			
	M I T 教授 イシエル デ ソラ プール				
No.17	寿命	昭55.5			
	東京大学教授 古川俊之				
No.18	日本に対する肯定と否定	昭55.7			
	東京大学教授 辻村 明				